

櫛葉越葉

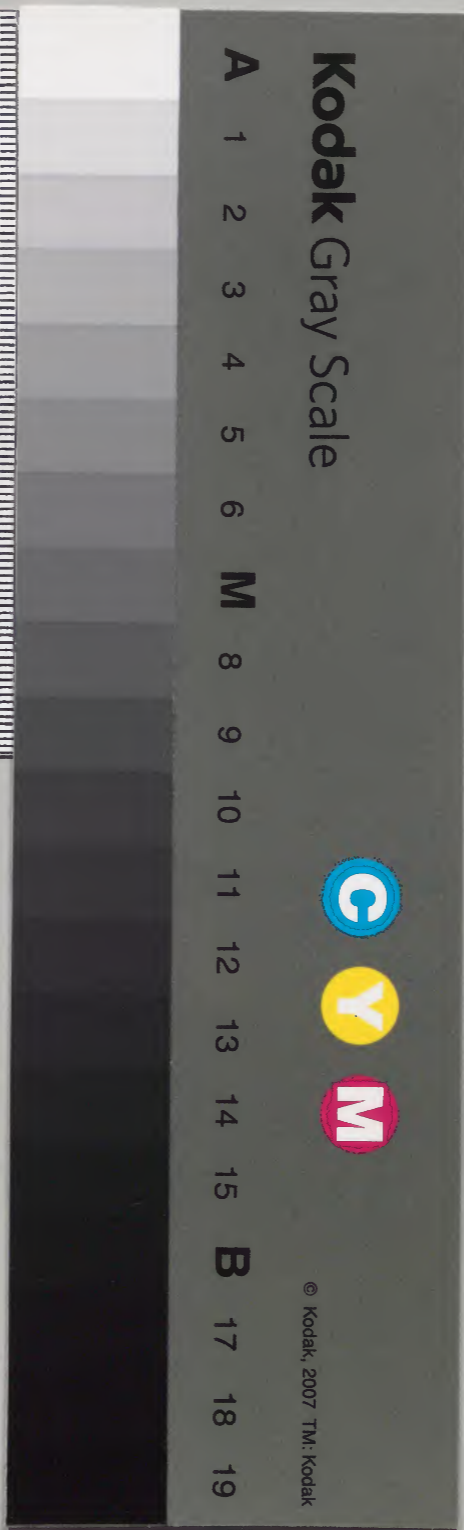
上

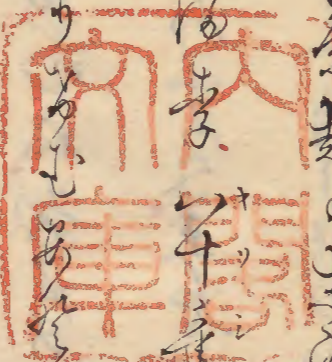
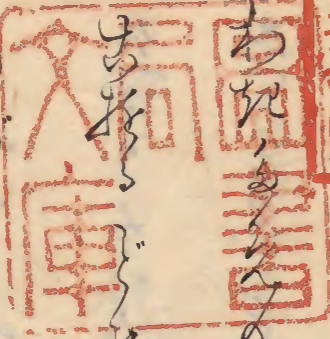
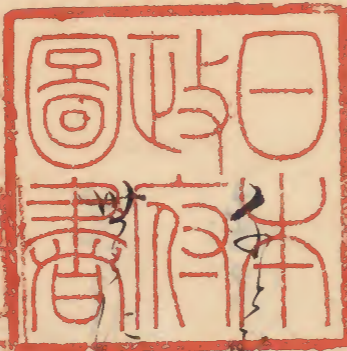
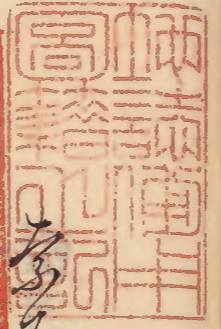
內務省圖書
 第一七〇七號
 和書部
 函
 冊

和書門
 二九二六二
 一三〇二
 二八〇二
 類號函架冊

內閣文庫
 和
 二九二六二
 一三〇二
 二八〇二
 類號冊架

內閣文庫	
番號	和 29262
冊數	2 (1)
函號	175 62





高直は景越のよきなりの自序

は孝 千尋のいんふ 幾流 景越 孫ふ 田竹の

より あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり

わね あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり

あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり

あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり

トラ 巻の清むやの夫は 孝初 あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり

あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり

にさやちいさむもよむ記あきなりまなこにひびき
 書^{カキ}きしきみまるとの月がねあはれぬほのりねとよ
 下せせきききききききききききききききききき
 急よりちりく^{カケコフ} 船がタウもよきねひやきききき
 花うの葉のいりてききききききききききききき
 せしとあつね^{カケコフ} 船のきききききききききききき
 孝^{コウ}なることかきききききききききききききき
 船のきききききききききききききききききき

情^{キナ}なる系はげきききききききききききききき
 分^クりてきききききききききききききききききき
 書^{カキ}きしききききききききききききききききき
 せしとあききききききききききききききききき
 の降の境上^{カキ} 船がききききききききききききき

此書歌辭の解ハ萬葉諸注家す今さうむらけしうは不讓りと聞草に
 昔ころの御中の地ふいしきうそ京師及び他邦の注家の考へる
 せしむしと此序中よそのつらうくわが 史のあひの地ふらげふ
 ちあはるまにあねいむし今あうくはしきとほふらりされと
 周子定まねるのそあせわさうにそのあひ踏んるさ心し
 下りせしゆし事きさうもあはるなう後の志あをいふあうく補せよ
 又此國の方言のそにうく他くとけし安由乃可是都萬麻保實業
 都我能奇をの類いすもあうくすそら他日筆暇を待て考へ追加入と
 せしむらうり

上卷地名舉目

一 題言 四條

一 故之 古之 越 故志

三 越道 美知乃奈加久雨 古思能奈可久奴知 越中園

一 利波山 刀奈美夜麻 刀奈美能勢伎 宇能波奈夜麻

夜夫奈美能佐刀 伊久理能母里

乎加未河波 雄神河 見奈疑之山 大野路

相野 寺井

一 伊美都河波 イミツカハ 伊美豆河泊 イミマメカハ

二上山 ニウカミヤマ 敷多我美夜麻 シタガミニ 敷多我美 シタガミニ

敷多我美能夜麻 シタガミニ

盖上山 カシヤマ 二上之峯 ニウカミノミネ 澁溪 シタクニ 思夫多尔 オモヒタタル 之夫多尔 オモヒタタル

安里蕨 アソリソ 安利蕨 アソリソ

磯之浦 イソノウラ 伊蕨能字良 イソノウラ

須蕨未乃 スソノミ

夜麻 ヤマ 布勢能字彌 フセノウミ

布勢能字美 フセノウミ 布勢乃海 フセノウミ

下卷地名舉目

一 多古能之麻 タコノシマ

多胡乃佐伎 タコノサキ 多拈乃 タコノサキ

舊江古江 フルエ

辟田河 サキダカハ 左伎多河 サキダカハ

麻都太要 マツタエ

奈我波麻 ナカハ

比美乃江 ヒミノエ 宇奈比河波 ウナヒカハ

乎布能佐伎 ウブノサキ 乎敷乃佐伎 ウブノサキ 乎不乃字 ウブノサキ

良平布 ラウヘイフ

多流比女能佐吉 タフルヒメノサキ

多流比賣野字 タフルヒウメノサキ

三島野 ミシマノ

美之麻野 ミノシマノ

安乎能字良 アウノウラ

英遠浦 エイト

湏加能夜麻 スカノヤマ

奈吳 ナグ

一 賣比能野 ウベノ 賣比河 ウベノ

宇佐可河泊 ウサカハ

鷗坂河 ウサカハ 婦負郡 ウサカハ

一 爾比可波 ニヒカハ 新河 ニヒカハ

多知夜麻 タチヤマ 立山 タチヤマ

叔羅河 シラカハ

波比都奇能可波 ハヒツキノカハ

延槻河 ニヅキカハ

可多加比可波 カシカハ

石瀬野 イシセノ

伊波世野 イハセノ

信濃濱 シナノハマ

伊頭敞山 イヅバヤマ

一 能登海 ノトノウミ

一 羽咋海 之乎路 氣比大神宮

一 香島 香島津 熊來 扞之島 長濱浦

能登乃島山

一 爾藝之河波 饒石河 鳳至郡

一 珠洲能宇美 珠洲郡 太沼郡

一 宇知久知夫利 伊都波多野 雪島 繁山

伊夜彦 杏人濱 大坂 越乃大山 之良

夜麻 獵道之池 角島 能登河

為良於景就の志す繁下紀の上

抑聖武天皇以十八年丙戌從五位下大伴宿禰家持の 大納言從

二位旅人の男より此のり家持の傳ハ万葉諸註家の説にはりりるればかたは讓り思ふるなり 越中守也彰繁一と続日本

紀にの來りしなり然かゝるもふ小萬葉十七の下或小家持以

天平十八年閏七月被任越中国守即承七月赴任所於時姑

大伴坂上即女贈家持歌と頌し二うとあり 任官の月続紀

うく六月とありて九月小閏ありしとの 又十九の卷に便附大帳使承八月五日 天平勝室三年 應

入京師因此以四日設国厨之膳於介内藏伊美吉繩麻呂館

餞之于時大伴宿禰家持作歌小

志るさうふりたりとせむなりとあらわれしを死むひくと

とあり又おぬき五日卒且上道仍回司次官之下諸僚皆共視
送於時射水郡大領安努若廣島門前之林中預設饌餞之奠
千時大帳使大伴宿禰家持和內藏伊美吉繩麻呂捧盞之歌
又十八の老おぬきの長歌ふ

此等の歌詞をよむに於ておぬきの長歌の一首は
天平十一年閏七月の御中より天平十三年辛卯七月の
御中よりおぬきの長歌の一首は

天平十一年閏七月の御中より天平十三年辛卯七月の
御中よりおぬきの長歌の一首は
以七月十七日遷任以納言仍作悲別之歌贈貽朝集使掾久米朝

臣廣繩之館二首の前題小

既滿六載之期忽值遷替之運於是別舊之悽心中鬱結

拭涕之袖何以能早因作悲歌二首式遺莫忘之志

志のこころ 在任六年とて 聞えり今更千歳のこともふれり差別

うきものこころ 在任六年とて 聞えり今更千歳のこともふれり差別

宝字二年孝謙天皇の勅小国司交替四年成しとて六年とて

浪とておぬきの長歌の一首は

おぬきの長歌の一首は

おぬきの長歌の一首は

五年のひに六守おぬきの長歌の一首は

是より越中今日いふまで四郡なり志しれどもおし任国天平十八年より
天平勝宝三年までの間に越中へ能登を促せ城中八郡を能登の国
名を廢傳し相作能登風玉珠海の郡を城守の郡を由へおし天
平二十年の春出舉に依り領内の諸郡を巡行の村羽昨海之乎路香
島津熊来饒石河珠洲海長濱に属目するうとれと咏出せし
的確き又職原抄おし城中と上國とすは延暦二十三年より元菱
八寺をのりゆり此を八坂あるは六國の定れしをてはら
おし任国の大目目あり上國目一人をて職負令を起し
志しぬと美系諸河原源くををといふもみたりおし任の四郡
をはらのめく能登國とて誤り又方人好古のそんうくし學

おしこの國の唐を重あを志しおし任の能登の國を起し
長濱地は別を能登とておし任の能登の國を起し
國を能登人といふとて誤りおし任の能登の國を起し
能登能登へおし任の能登の國を起し
天平勝宝三年元菱高元能登能登を授くとておし任
を授くとておし任の能登能登を授くとておし任
十六の能登能登國を起し能登の者一所あるはおし任國を
を授くとておし任の能登能登を授くとておし任
越中の國府對水能登能登を延喜式和名抄能登能登を授くと

萬葉十八卷より此越中の國名を記す所の於て誤りあり
 と言ひ日の國に當り天子のありし所なるを以て越中の國
 名を傳へたるに非ざる事なり東夷之中有日高見國といふが
 語例と同しやれどしは越中の國を以て言ふに非ざるべし
 國府と思へば新水のそと源義仲の勅より國府を列すと源平
 盛衰記ふこと二勅より今の國府を以て永正のころ上杉房経越中の
 國府を治りし北原九代記よりあやまらざるに非ざる國府を
 列すと是も非ざるに非ざる古國府古府村越中ニル
 是れより孝康の諸由之を謂之衛と云ふなり國衛を以て越中
 一國の治定を云ふはつらと云ふことと云ふに十の孝より天平勝宝二

年正月二日於國廳給餐諸郡司等とあり是れあり按ずると
 國司の館とて古國府指越中この考はハルカ加賀の國司の考より推察
 の地を以てしは海を以て地味と云ふ又その地を以て國司村あり
 國司村ありし越中を以て國司の司あり延暦寺の三個
 上座寺主都維那の考あり是れを以て延暦寺三番式に凡延暦
 寺三綱一任之後任諸國講法所其上座寺主に講師都維那
 師と云ふなり

故之^{十七} 古之^{十七} 越^{十九} 故志^{十九}

十七長
おのまきみまけのたれし 志於さうふいしをさあに
十六
志あぶこのふいしをさうふいしをさあに
おのまきみまけのたれし 志於さうふいしをさあに
十九
志あぶこのふいしをさうふいしをさあに

越は名義といふに垂仁紀に額有角人乘一船泊越国等飯浦
なりけり知國の人未だ調定の品運ひしより越名はけ
又唐山とさうし 諸越といふ調定志がし越の山とさうし
志あぶこのふいし 日本紀纂疏に彼地有坂名角鹿行人必踰此坂入
越絶故曰越の設はともなるらん越のこゝ義はさうし故之といふ凡て

この程よりわきへ古流の義あり冠辭考に安志比奇能山坂越而去
更年緒奈我久科坂在故志尔之須米婆この志あぶこのふいし
越の國のいしをさうしを右の科坂とさうしをさうしをさうし
階坂も城の國ふとさうしをさうしをさうしをさうしをさうしをさうし
とさうしをさうしをさうしをさうしをさうしをさうしをさうしをさうし
信濃濱とさうし科とさうしをさうしをさうしをさうしをさうし

越國^{十九}

十九
いしをさうしをさうしをさうしをさうしをさうしをさうしをさうし

越國の字は書紀の景行天皇廿四十年庚戌にさうしをさうしをさうし
事記舊事紀には高志國とさうしをさうしをさうしをさうしをさうし

越解 十二

古之録字美

十六
十七

わきもとをこころみのこやみむらの海のことこの海は志保なるふ

こころむかむか志保なるふと云ふ海のある所の海をいふと云ふ

こころむかむか志保なるふと云ふ海のある所の海をいふと云ふ

越海コシノウミの字ハ書紀ハ白鳳十一年壬午に云ふ云ふ越解ハ

解ハ萬葉記に云ふ云ふ解の字ハ云ふ云ふ冠解考ハ即ち解ハ

書ハ置ぬ既文に渤海ハ海之別名也と云ふ云ふ人の説ハ

倦多禮ハ借訓と云ふと云ふ云ふ云ふ云ふ云ふ云ふ云ふ

三越道 九

こころむかむか志保なるふと云ふ海のある所の海をいふと云ふ

仙覺師の抄ハ北国を以て越前越中越後也と云ふ云ふ摘干蔭云

三八真の意云ふ云ふ思按古事記ハ高志道と云ふ云ふ云ふ

と云ふ道ハ北の道と云ふ云ふ又云ふと云ふ云ふ云ふ云ふ

高志道と云ふ古事記ハ北陸道の字ハ通乎北陸の字

崇神紀十年癸巳云ふ云ふ北陸道の字ハ崇峻紀二年己

酉云ふ云ふ云ふの道を踏ハ云ふ云ふの母ハ云ふ云ふ

美知ミチの奈ナ久爾クニ 古思能奈コシノナ可久奴知クニノチ 越中国コシノクニ 端詞ハナコト

こころむかむか志保なるふと云ふ海のある所の海をいふと云ふ

こころむかむか志保なるふと云ふ海のある所の海をいふと云ふ

越中国の字ハ續紀大室二年壬寅云ふ云ふ云ふ

利波山

カ奈美夜麻 十七

礪波郡

端謂 十七

十七長

あまきりのみ... 十九長

しや志紀... 七

十七十八の... 地景を平家物語... 一代要記小越中加賀...

あまきり... 山... 関の五右エ門... 行の... 初...

カ奈美能執伎

十六

あまきり... 加茂真淵... 二...

良見云大宝
八天化ノ誤

きらよとあはく唐く流けしふふくし若按此関りのけり
と云ふや関塞有修防人と云ふこと考證天皇大宝二年と云ふ
こと今月の御出の詔書に唐の不破城の事云々云々と
関と云ふ鼓吹軍器と設け関の守固の事云々云々と云ふ
事考證唐の事云々云々の道程の事一時二関あり云々云々
不破関及び唐の北近江の常田の関と云ふ事云々云々
唐の関と設けらるる但し不破城と云ふ事云々云々
事考證あり云々云々の事云々云々の事云々云々の事云々云々の事
於存せしが也城の事云々の事云々の事云々の事云々の事云々の事
事云々の事云々の事云々の事云々の事云々の事云々の事云々の事

考へ新し又按唐波関の遺跡今名^{ニスルキ}勅^ニより三十所あり石版
新打を七町あり云々安居山^{アノゴサニ}観音の石碑あり此存左右
小高き畑あり中道を云々山田ありこといふ所の関あり
いひつらふと里人の関畑と云ふ又関の谷内と云ふ事云々云々
逆沿打の関の五石あり云々云々云々の事云々の事云々の事云々の事
宗祇法師の事云々の事云々の事云々の事云々の事云々の事云々の事
月ふと云々の事云々の事云々の事云々の事云々の事云々の事云々の事
らふこと云々の事云々の事云々の事云々の事云々の事云々の事云々の事
又名を云々の事云々の事云々の事云々の事云々の事云々の事云々の事
此等の事云々の事云々の事云々の事云々の事云々の事云々の事云々の事

とてハ山國皆上甘なるりて真紫新と載せ運多村具より
會津風上記に雪車雪舟をかく又輜と讀て多梨の訓を史記
撓に作漢書より撓に比るれは沈存中の筆談の凌床
此を考ふる是るり冷泉為廣の歌に是を考ふるもの也
孩の一とらに否やとるれは其の事とあるに山國
かたはるるに雪具をれといふ事難く為廣の永平の比修養の
七尾の城に富山氏の歌をかくと出づるに人をも遂下大水
六月七月廿三日富山氏の報よとほらるるに其つづる
るるに冷泉為村の唐摺記より考ふるに其北國皆中
此より我用なりとて流せしむるに其不引所守又の義

るるにあり夫木桑仲正の奇ふか事とて城の山海の標すら
るるに沈もぬをかくるに其もかまの標の字又掲の
字もかくるに其村人の唐具なる

宇能波奈夜麻 十七

十七長
又わさばふらあまのむらとて福にみしあるるあまぎりり乃
とてはらるるにいとむいそむとてむとてむとて

畧記に地ふふ河のまのむらとて山をりしとてあれとては解とて
なるとて類字名所集ふ城中山又宇能方角抄に正志書にあり
福に印花山菽波里に藤波山とていふも又源平盛衰記壽永二
年藤波山の役木曾義仲六動寺の国府を殺し槃若野の御河

端小到て軍議下しりあを鎌倉宮記の卯志山の禁陣下し
多り鎌倉宮記の世々ううこの人の他なるものありき
とまねわきぬとすゆり一問はる遺をまゝおき也何ふ
まれ万葉小碓波山くらん今せつを藤波抄より方人吉来口耳
おほい道林おほ山のゆり石坂打り十四山夫之城道守の
山の車馬ふききしゆりしりてあう室の歌ふああぬと
杉敷のせし白妙の卯志山のううよの月とゆり春雨抄ふ
このわらじ地ぬ世のううふらまてまゝおき也何ふと
まのうまねわきぬとすゆり一問はる遺をまゝおき也何ふ
とまねわきぬとすゆり一問はる遺をまゝおき也何ふ

寓居まゝはせりゆりてあを鎌倉宮記の卯志山の禁陣下し
多り鎌倉宮記の世々ううこの人の他なるものありき
とまねわきぬとすゆり一問はる遺をまゝおき也何ふ
まれ万葉小碓波山くらん今せつを藤波抄より方人吉来口耳
おほい道林おほ山のゆり石坂打り十四山夫之城道守の
山の車馬ふききしゆりしりてあう室の歌ふああぬと
杉敷のせし白妙の卯志山のううよの月とゆり春雨抄ふ
このわらじ地ぬ世のううふらまてまゝおき也何ふと
まのうまねわきぬとすゆり一問はる遺をまゝおき也何ふ
とまねわきぬとすゆり一問はる遺をまゝおき也何ふ

夜夫奈美能佐カ十八

やらまのきりにやどかほもあふふありはむやいふつけとや
 愚按中古何人の藪波ヤフナミは造と誤るや神名式此郡小荊波神社あり
 荊を夜夫ヤブと訓むる例、和名抄新川郡の大荊御と抄保夜夫とむ
 る知へ古コのいさ藪ヤフの義を草木のやうにせむる
 今云竹叢より隈寸和名抄呂氏春秋の沢無水日藪の説と引
 る澤の水を北に盧荊棘の類叢下れと又赤深右馬家集には
 志者し藪の藪と云く北をくらあさく此ヤフ波ナミの音
 形波河小藤波郡多治比部北里之家とあり其地藤波郡
 ともむらいら志海宮島郷の矢波村を北波の約とせし
 大波の地神祠よりく此波の北里は岩れり方今白田村

良見北里既
 云如郡司名
 然と本文郡
 北里当り
 北里に誤る

又奥法村とせむつうらうらうれとこいふあり

伊久理能母里イクリノモリ十七

いふいふのきとれおのよかいはをむけむはぬかきとむ

子産を誠後小伊久神社ありかの國北地を云此説より
 とぬ思ひと愚按、藤波郡磐志郷、井栗谷村あり此は
 とれおのの林をくくくを藤ありて奇詞、奇をくく人
 況コトの湯泥は誠中くくを神といふ誠後とくす、孟浪
 志者、こくは、頭季の歌ふく、郭を夢あうらうら多つねあり
 いづらのきり小嶽お孫ぬく、くくを引の、頭輔
 小加賀守の称あり志れを、頭季の、藤波の父をむくものあり

ほかに加賀の國へ引く際國をわたり幸ひに城中にとりて居てし
かゝる山ありてふ山此の山なりて其の山ありてふ山ありてふ山あり
ありて引渡す

乎ヲ加未ガミ河波カハ 十七

雄神河 十七 端詞

雄神河の記述ありて其の山ありてふ山ありてふ山ありてふ山あり
ありて引渡す
此の山ありてふ山ありてふ山ありてふ山ありてふ山ありてふ山あり
ありて引渡す
此の山ありてふ山ありてふ山ありてふ山ありてふ山ありてふ山あり
ありて引渡す
此の山ありてふ山ありてふ山ありてふ山ありてふ山ありてふ山あり
ありて引渡す

口占より雄神河俊教の歌ふと二と首とを被せ引てなす
見奈疑ミナギ之山シヤマ

雄神河の記述ありて其の山ありてふ山ありてふ山ありてふ山あり
ありて引渡す

雄神河の記述ありて其の山ありてふ山ありてふ山ありてふ山あり
ありて引渡す

雄神河の記述ありて其の山ありてふ山ありてふ山ありてふ山あり
ありて引渡す

家也といふことなげさふふりも河川が北きく河段
とむらむ此山後のをけしきくもげとて通して今の
植生村蓮沼村の領山の矢立山にはあつさくやさあまむ
ふかぎ一山はわりの山あむむらちさうされこの歌のうら
ふ利波山とて今せきうあけ山の日向ふ海石揃ふ多くと
いひき定後の結古今糸乃撰者也とのふ城中古後継の父
あれし城中へさうのりあまくと是しや城中ふくま

^{オホヌゲ} ^{十六}
大野路

^{オホ}おのぬちの志多けの志多けともみしからつみらひむらけん

といひて遺名きにあつてをいひたつ志免ぐもあむ和あ妙
瀬波歌の御あふ大野あむぐ共ころろの山歌といひくす
御説きふくしひ伝やむ射水歌二上るの大野邑の標より北の
くたむく一唐きあむ世あつとてお望み歌を大野歌といひく
さふとあむもや河にうらひ大野の邑をあむとて附むとての
程かむくしあむく

^{スギ} ^{十九}
摺野

^{十九}おのぬちの志多けの志多けともみしからつみらひむらけん
摺の字書に真報及摺俗字門横梁とあれく之とすきし
訓よるに字義夫當とてあむはくろ志多れとて三代實録真名伊

物誌と相成すも一州に於て何れもゆえあるは古河に
從ひしきふあつてあつて可なりし又書記に石上振之神カミノ
と書く楯の字とをききしと訓し旧事記と楯とすきと訓
すもとめて 相成の楯は後入楯の誤りなりと傳へて
和名抄抄の條にも今信用楯非也といへばなり是楯の字と字を
に於て柱也註せしゆえなりしとて此相野と藤原等に
城申れ名所とありは地藤波郡杉末邑のなりと小中
かづらゑしふ庄金剛寺村辺庄川の出と古へ相成と方いひて
しりしなりしゆきまの致微なるに情名の人を於て論
ふしとる寺のなりも傳へし人なきもむねの地ふさなり

まど寸許志きぬなりとありはこゝろ万葉の歌ふなりと
とありしれく微しとすにあり

寺井 十九

十
名のゆゑやそのをそめりてゆふておのりのことかづのなり
諸名所記諸家歌枕とち井の名のきりて其國名をりて
傳へ愚按も十九の卷のけりて勝室二年の春とありは
城中在何中なりとありはかゝるに城中多き志て此根の別稱
今もこの國のなをり花と淡紫色なり二月のけりて百金と
花状似れしことゆゑとあり又かゝるに心もいふかゝる
とはいふことこの地と陸奥とありてかゝるにあり

とらより流るるあや今正北風とあやの流と

元どろく凡と流るる二十四風の方維あり渡流の舟の流る

小北海丑首より吹とあやの流るる

あやの流るる 佐渡国とあやの流るる 正丑より吹とあやの流るる

北東風とて御の詠せらるあや是なり

北の流るる 北人の流るる 丑北尾寅ハ東首より其間

より吹流ゆるあやの流るる

御の流るる 詠せらるる

畧の流るる 世寅のあやの流るる

北東風とて御の詠せらるあや是なり

北の流るる 北人の流るる 丑北尾寅ハ東首より其間

より吹流ゆるあやの流るる

御の流るる 詠せらるる

畧の流るる 世寅のあやの流るる

北東風とて御の詠せらるあや是なり

北の流るる 北人の流るる 丑北尾寅ハ東首より其間

より吹流ゆるあやの流るる

御の流るる 詠せらるる

畧の流るる 世寅のあやの流るる

北東風とて御の詠せらるあや是なり

北の流るる 北人の流るる 丑北尾寅ハ東首より其間

より吹流ゆるあやの流るる

御の流るる 詠せらるる

畧の流るる 世寅のあやの流るる

北東風とて御の詠せらるあや是なり

二上山 十九

敷多我美夜麻 十七

布多我弥夜麻 十七

敷多我美能夜麻 十八

盖上山 十七

二上之峯 十九

梅聖

俞山 夔一足 走妖鳥 九頭鳴

也 法 一

敷多我美夜麻 十七

敷多我美能夜麻 十八

二上之峯 十九

盖上山 十七

畧の流るる 世寅のあやの流るる

北東風とて御の詠せらるあや是なり

十七族双

七族のふらうやまたわいせし

十七

七族のふらうやまたわいせし

十七長

七族のふらうやまたわいせし

十七

七族のふらうやまたわいせし

十七

七族のふらうやまたわいせし

十七

七族のふらうやまたわいせし

十七

七族のふらうやまたわいせし

十七

七族のふらうやまたわいせし

十七

七族のふらうやまたわいせし

十九

今二上山の魏然としてあつる山を二上の庄名あり二上

神ハ神名式にいふ射水神社是也此神を今大権現正一位

国主とて養老二年に開基養老寺これを護す当初お殿

講堂鐘樓堂塔末社一百二十社四十九院總坊數三千八百社人

數多あり境界小四門を構ふ其東門ハ城光寺村北門ハ大田村領の

渋谷南門ハ大門村西門ハ手洗野村と限るこの四ヶの村領皆この

神田のち中古兵乱からて廢失すといふ二王門ハ寛永十三

年まで存一十四年今の社前小引うつす其後より大権現

本社三間拜殿三間ハ五間二王門二間ハ三間餘り講堂鐘樓ハ

古礎のこころをわきの先君 龍 徹の二公より神領ホ寄施あり
 て今ハ別当慈守院本覺坊金光院是と守護してさうく神
 慮をやすむは十七巻の終二上山ホ神さびてといふ也此神さうり

この神のを位りしハ日本後紀延暦十四年八月統日本後紀承和七
 年九月文徳実録舒衡元年三月三代実録貞觀元年正月より之

ふき勅撰名所集より二上山越中国射水郡より
 淡溪 十六 思夫多雨 十七 之夫多尔 十七 淡溪埼 十九
 題詞

^{士蔵双} ^{十七} ^{十七} ^{十七}
 志ぶたふのふさぐみみきにわ せとむとふさふはあ
 うまるめい いさうらゆのむさぶふのまよきいさむんをすはるに
 志あふのさびのあふふあさあまにすはる波ゆあさふ

^{十七長} ^{十七} ^{十七}
 志うたまるをあるきにすはる志あつたのさびもさうりさうく江の
 志うたにのあさるれさ終ふねさうあささせうはさきすかあさう
 志うたあをさささわうゆこれまにはくよあきさむさまあといあ



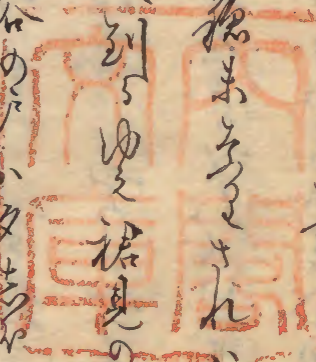
淡溪ハ二上山のうらうー大田村領つとき 志あつたといふはさうり
 志あさるれさ終ふねさうあささせうはさきすかあさう
 志うたあをさささわうゆこれまにはくよあきさむさまあといあ

そといひ志あつたのあささいささう淡溪といひ志あつたのあさその
 志あさるれさ終ふねさうあささせうはさきすかあさう
 志うたあをさささわうゆこれまにはくよあきさむさまあといあ
 と禮とすう〜〜山音洞の地系とさむさう八雲の浮説れさ〜

かきとありしころをむのし人麻呂の言ふ如く十二巻の七歌
ふるまひをきしと山をくつたあつたのくしとしい十一巻の
いふことえいひつとあつたやいひ十二巻のわきまをくつた
いふことえいひつとあつたやいひ又いふことえいひのあつた
いふことえいひつとあつたやいひ十巻のあつたやいひのあつた
らきみといふことえいひ皆志をきつた城中の海はあつたや
北よりいふことえいひ皆志をきつた安里種出利種の子
と用ひて他ふといふことえいひ皆志をきつた物記ナニシロと
望長をきつたやいひつとあつたやいひ一説ふといふことえいひ
いふことえいひつとあつたやいひつとあつたやいひつとあつた
いふことえいひつとあつたやいひつとあつたやいひつとあつた

まわりの城十にひき越中の海をきつたやいひつとあつた
とてむげあつたやいひつとあつたやいひつとあつた
一又二説をきつたやいひつとあつたやいひつとあつた
つとあつたやいひつとあつたやいひつとあつた
あつたやいひつとあつたやいひつとあつた
是と新王城の海をきつたやいひつとあつた
歌をきつたやいひつとあつたやいひつとあつた
大崎のあつたやいひつとあつたやいひつとあつた
十二のあつたやいひつとあつたやいひつとあつた
海をきつたやいひつとあつたやいひつとあつた
文獻とす

村原の山くりに中石をすそあふ山くりに歌よみよめ
 其れ其れ諸君はるる人万葉の流藤末よきされは地光
 ち也より二上山の東の山橋をくく諸君へ到るゆは君見の山く
 美と山くをよすもくし光原の藤谷の山くは其れ其れ
 あま家よきまの宗社ゆるりくもりわの山くもふくもくは地光
 する程をくくは諸君の山く夕塔の山く地光よかあより光原
 城中へり向の考へ見奈粒之山の愚注ありす
 布勢能宇弥^{十七} 布勢能宇美^{十七} 布勢乃海^{十九}
^{十七}ふせのうみふねけすもくねまへとれへあきこれ
^{十七}ふせのうみねまきつちもくあまかひいやくもくは君志ぬもん



^{十七}うらうらふきおみつるふあまかひあまのちうらうらあき
^{十六}いかにせふせのうらうらあまかひあまのちうらうらあき
^{十六}あはくけしつちあまかひあまのちうらうらあき
^{十六}あまのうらうらあまのちうらうらあまのちうらうらあき
^{十六}あまのうらうらあまのちうらうらあまのちうらうらあき
^{十九}あまのうらうらあまのちうらうらあまのちうらうらあき
^{十九}あまのうらうらあまのちうらうらあまのちうらうらあき
 卿の遊覧布勢水海賦の自注に此海者有射水郡舊江村
 也とかきしきり
 又在の字とをなふと有の字を用ひしはむすれは抄字に注
 後の人のあせもあせしはれ仙傳るともあまのちうらうらあき

以の西又龍舟を一獲しこれよりさへくつり 以雲の津設ふ
 布勢海邊あり水海あり家持河内依く遊所ありとて略解
 にい布勢と初名取の布面ありむといと抄の訓にヌノニシ
 法をいはいくありと神名式に布勢神社を此郡不載つた是を
 まさしく記徴しるあり此神社今氷見郡内布施村あり は氷見郡ふ
郡あり
 中古以来氷見町辺八九ヶ村の間を氷見郡内又氷見庄と唱ふ即ち天正八年三月織田
 信長より菊池右エ門入道へ書す矢印の書中にも是又書す四年あが国祖高
 徳公の遺誡の書中にいふありとて又式に同一神名なる布勢神社
 其のこゝを民間かかひ私唱するなり 又式に同一神名なる布勢神社
 此国内に新川郡ありとありと布勢保大布勢保布勢川をこの地名今
 公衆をいふをそとまうりて此とあは別の地なり人の遊覧の方飛ハ
 村の東に南條保内とていふあり布勢保大布勢保河布勢保酒をり
新水新
川西郡

の布勢とも中古より布勢の字ふれを戦後中
不文の人をアセくゆふは布勢と書滯る候し 此地古国府とさへく
 二里半より少く御の国府の館より出立ありとてよきわりの遊所
 ありそのえんを入海より湖氷のりふもそりていふくいふあり
 さえといふせしむる 種如たむいほりよりこすふりの世共其
 多勢ふ酒のり 觀三四間小東西の延十二町より又より西に又
 十三町はよりいふありのこたり志つたぐり 布施村に丸出ふ奴
 古祠神さして御蔭明神 又見影又水影少くは或を二穀以神を布勢神
のこゝにいはれり 古祠社にふれとていふあり
はく 古祠に人の脚をあらすふり今もてあはれり是ふ
この祠を耳浦の神と
名田長が初めとて 古祠をいふに
 十は宗越前掾大伴池主より卿へ贈る書に依迎將使事今月十

良見云深海ハ
兵部式加賀國
馭馬より深見
さしつりし
一志の成本書
能登郡より深
見村とすすの
更ニ地理と共ヘリ
又此時加賀郡ハ
今名川河北郡の
地より此ニ合ハ
河内郡といひ境ニハ
今の金沢の地と
いふもの皆非ニ

五日到来部下加賀郡境面陰見射水之御戀緒結深海之村身異

胡馬心悲北風云々ナシハ池主馭使をむくつりて天平勝宝

元年十二月十五日との部下の加賀郡境小来と

中の一郡名あり即今の河北郡是なりされど

之と部下と云り境といふ今の金沢の地なりハ

卿の面陰を射水の御小川

より曾て池主越中の掾をさしつりて

深見村と志しふと海をかきさすなり

名はとと池主の御と志しふ面陰見射水之御といふ

は名はけけりし也但しこハ水の御の志いあり

深海ハ深見と

能登鳳至郡の深見村より八町をかり

のりれどとの少子雄瀑雄瀑

とて十丈きり此巖頭より五段小岩なる

二の瀑布あり右むとふ

そは水々の志しふ小岩をけりて

人すさどし

にえんはけり瀑の中流は

すやうなる松栢志すうふ

のさしひは

幽死せり脚の越中固司を

かき前より

能登を越るありては瀑布なりと

えんを池主と志しふ

志はけり

志見の景越の志見系もん景の上

の田子柴庵なるものありしにゆりて水もふよしゆのこころ

舊江 十七

古江 十七 跋詞

十七長

あゝこの下へゆきまよひしにゆりて水もふよしゆのこころ

この詞の下の句は十九卷のしるしに記すところの端詞に

舊江に記す十七卷中の跋詞は古江に如く又和名水の村水郡の

御名も古江とありし古江舊江とも同多ふとすしき一なるに

十七卷の遊覧者記水海賦の注に水海者水村水郡舊江村也と

載すこの海の名有るを誤れども 水村は舊江ハ布勢湖の北の邑名

著明一宗良親王の撰ひしとす新集和歌集の坂夫寄り

君代に記す古江のあや文とす花の波とすまふ根はるくと

しるしとて採ふは邑名四百七十の十を厚徳の時をいれ厚徳

ありしやまを水のり又後にも及なるやとて後集に

名もまゝとすされど水もる人の園おより下田子邑をい

山の尾つゞきの北と舊江の遊覧とすはふよしきやあゝ

新拾遺集の注に乘田の寄ふ五月内と舊江水の管也と

記すしるし多枯の浦波としりき寄詞と如く之引今下れ

いゆへに多枯と寄勢とすせゆりて舊江に二水の間の邑名

あるをいと思はる者採打原の田の小名も古江とすまあゝ

よかゝる先の一なるに或説今の下久津呂のいへの舊江にむ

たを採る寄詞も比美乃江過底多古能之麻字比多毛登保

里安之我母能須太久舊江とありて下久津呂とて道次と失へ

辟田河十九 左伎多河十九

十九長 杉らうららふいふさきさきとてかきせふあやこいづらと

十九 世あみのこゑと少ありさきさきとてかきせふあやこいづらと

十九 といふあやけららさきさきとてかきせふあやこいづらと

仙覺の抄小越中とあり藤原系に討水取とてかきせふあやこいづらと

保の西田思河名とあり世とてかきせふあやこいづらと

これより紫乱橋泉の二邑名ありて西田山中瀑落千巻

流連山河とあり世とてかきせふあやこいづらと

山河とあり世とてかきせふあやこいづらと十九巻長歌の

洞とてかきせふあやこいづらと西田

とて泉お辺しめへ西田御田とあり世とてかきせふあやこいづらと

辟とてかきせふあやこいづらと又代唐の指海とあり世とてかきせふあやこいづらと

瀑とてかきせふあやこいづらと地留ふありて

麻都太要十九

十九長 まつとふのさきさきとてかきせふあやこいづらと

十九長 まつとふのさきさきとてかきせふあやこいづらと

まのふと新ふと道の叙次とてかきせふあやこいづらと

杉田江とて流の名ありとてかきせふあやこいづらと

四とて百六十年とありて邑名ありとてかきせふあやこいづらと

よのこの地をこころしむにむすむ

奈我波麻 十七

十七長
ほろここのあづまをすまふてうねひりい

いづここのまほろくあまをそとよのなつふよりいそ氷見
さう字波まをれあまの池田河邊 阿尾 菟田 小杉 泊をのこほ
けきまをまほろくいひりさうまはく城のまほろくせうより
いそまをさしひて地まはあまぬすうまをまを仙覚の抄まの
うろれ寄枕もまの萬葉のまほろく城の中まをまのまほろく
こふのこころる想一説氷見より太田村鎮の岩崎まを三里許の
濱まをまをまをむやいふ人あまをかくては万葉の歌詞を

の叙次まをふねを

比美乃江 十七

十七長
ほろここのあづまをすまふてうねひりい

和名抄の鯛を古乃之呂るり遠江のへいつねと
いれりり比美乃江ハ藻塩草ハ日美江とあり比美即ち今の氷
見浦とありと著明ハ本万葉十八卷田辺史福麻呂の哥乃
端詞ハ至氷辺遊覽之時述懐とかいふ事らせしるど中古好事
人の氷見ハ文字誤化見出せり監觴ハありり子孫ハ説まると
氷辺ハ水海の誤とんせると萬葉の目錄及元暦本ハ水海ハ
作せりといふれ、畧解ハ水海ハ改めたりなり此説考索を失ふ

十七長
はつとえのあがらますまてうあひがひ

和名抄の宇納御を今の宇波るるあがらまて 國祖高德公

天正十三年英遠乃菊池右エ門入道へ賜書文わと石動山の

下うあらまてかぎりとしつうらまて

乎布能佐伎十七 乎敷乃佐伎十八 乎不乃宇良十八

乎布能浦十九

十五七
わがちがぎゆけむそふのたまひ

十六
そふのたまひはむらうひわとすふみもあぐまにあらふ

十六
むらうあぐまはむらうひわとすふみもあぐまにあらふ

十五七
ふせのうにそふねはむらうあぐまはむらうひわとすふみもあぐまにあらふ

乎布能佐伎と太田村領の岩崎と以説あれども十九の巻

そふの詞と布勢湖中の地名とれども此説あらずはあ

按ふ南條保内の朴木ありむらうのゆ名朴と乎布と音便相

ちうと木を佐伎の約言るるされむらうの朴木邑辺す

と布勢の湖水をけむらうと出崎ありと乎布能佐伎と云し

るらむらうかあはむらう音便と唱今或は阿努庄の大野新村

かむらうとむらうのこれ開墾のむらうと徴をむらうと云

多流比女能佐吉十九 多流比賣野宇良十八 岳姫十九

十六
かむらうとむらうのこれ開墾のむらうと徴をむらうと云

十八
かむらうとむらうのこれ開墾のむらうと徴をむらうと云

三島野とくしと高田とさうとくしとのせり家隆のうしと
夏とれどみし海系に菊のゆつとくしと菊の夫とくしと
家隆のうしとくしとくしとくしとくしと

安乎能宇良十八

英速浦 十八端詞

大
そのい虎の地をさうとくしと菊の夫とくしと菊の夫とくしと
山洲とくしと和名おの郡のふ英田とくしとくしと洲とくしと
諸國ふさうとくしとくしとくしとくしとくしとくしとくしと
此の戦國とくしとくしとくしとくしとくしとくしとくしと
昔とくしとくしとくしとくしとくしとくしとくしと

須加能夜麻十七

十七
十八の自註射水郡古江村取獲蒼鷹と跋あるうしとの奇
形のお徳ふさの安打の山とくしとくしとくしとくしとくしと
とくしとくしとくしとくしとくしとくしとくしとくしと
又万葉はくしとくしとくしとくしとくしとくしとくしと
類聚名所和歌集とくしとくしとくしとくしとくしとくしと
とくしとくしとくしとくしとくしとくしとくしとくしと
とくしとくしとくしとくしとくしとくしとくしとくしと
とくしとくしとくしとくしとくしとくしとくしとくしと
とくしとくしとくしとくしとくしとくしとくしとくしと

この海河は新河新渡延槻河時作奇くありとあり早月河なり
仙覚抄這槻河と伝ふ事なきなりこの河の濫觴も立山の
劍嶽の東澗より出ず水も今も大河なり

可多加比能可波

かこひのこのせきうくゆくらのきふと好くあつたふひむ
おちるまつかういづいのたきぬごとくいふまゝひまやまふもん

今の片貝河なり此河仙覚抄藻塩多し婦負郡とす此

いふも新川新うり是に海の源も此劍嶽の北澗の水なり

石瀬野 伊波世野

十九長 いせせぬふらうまこまゆもそりこらに

十九 いせせぬふらうまこまゆもそりこらに

和名抄新川郡石勢郷あり兵部式越中の駄馬に磐浦瀬

此石瀬より便ちその西岩瀬及ひ東岩瀬なり昔も昔も

北へ廣く々より三里強よりぬれと岩瀬野といひとるん

岩瀬の森といふもあつとて定家のうらまも岩瀬野のなると

多しとて岩瀬の小きとゆふ雪をうりて又岩瀬渡能登

をたてて往く入混下りてむ敏るむの往く岩瀬

渡の奇小宮崎山とす今もこれをあはれとて奇とるん此

城中石瀬野の同形小宮崎山ありて此石瀬野の奇とおし人

らむをたてて志すも此岩瀬山といひ同形なれども其間十余

良見云此説
非ナリ石瀬野
ハ射水郡ニ
上庄岩瀬
村辺ナリ今
モ此村辺菽
多生セリ

里と申すところを流し流さず速く入り内を能く舟の岩瀬の渡の地
と考ふるに鳳至郡野河邊とて流し入今山上に神社あり
延喜式岩瀬は古神社是之此社の所とて宮崎山といふ野
河は能く舟の巨河とて河内村といふ舟渡艇あり宮崎
山の所より一里をこると河下ありいれり河上を御来とて
宮崎山ををいぬ舟渡艇を記岩瀬海といひり
舟を渡の形舟舟を岩瀬のわたり小舟をて宮崎山を
出月形又岩瀬の形舟五月内いし舟の渡波とて宮崎山
雲をいれり河に二瀬ありて月二橋ありつら
方人月の名ありいふ岩瀬河二瀬のいれり舟のわたり流

月の形より舟とて頭良とあり考ふなり

信濃濱 シナノハマ 十七

十七
越中四郡の海濱に信濃といふ地名あり志形を前よりいふ志形
さういふ志形ありて是れ此の河のいれり舟のわたり
いれり新川に魚付の北西村木道の河濱をいれり志形
志形をいれりいとすとノとおと流しせし後世にわたり舟
河内神社とてありて幸ひ舟渡艇の文字を載しありて
舟渡艇とて舟のいれり舟をいれり舟のいれり舟のいれり
舟渡艇とて舟のいれり舟をいれり舟のいれり舟のいれり

邑名小あしど

伊頭敵山

十五 ねづとと志ぬつくまふかききん しののやまのあまうのゆいび

いつふをいつれふ回しと畧解しとあまうのゆいび

城中の名ふ入きうは考ねがつうねとねと新川新小伊頭

林邑ありしまをこねあまうの山とひのり

能登海

十二 のよのふつととあまのいさびのさうふしゆはまうが

は海いりつとと能登の海とさふとひのねはと能登の

海とさふとあまうの羽咋海珠海海といつ海路をわがし

家産のねをねぬぬのふのさうねあまのひいゆい

あまのつととあまの城中の国とさふと城井と能登海と

あまの海とさふとあまの又とさふと能登ののさふ

あまの志とさふと十九とさふと能登のいさうとさふ

能登の能とさふと大和国海と能登と春日山とさふと

河といつと十とさふと能登のいさうとさふとさふと

此の海とさふとさふとさふとさふとさふとさふと

羽咋海

之乎路 十七

氣比大神宮 十七端詞

十七

志をむらりたぐるんをほくひのあまられまうらねむらば
 羽咋海をすて羽咋郡の海とさるや又ハ羽咋村辺の海とさる
 しもやまの之乎路うらふといふとすしを味むぬの浦志雄
 庄より陸路をぬぐがの浦にその名をいふなりとあらはし
 海にふりあむの羽咋村ハ舊事記の羽咋国是神名帳に記す
 羽咋神社を載ととの羽咋正院の羽咋村にあり社をうらうらり
 又之乎武志乎神社と云此郡の邑知院内の志雄庄子浦
 村の志乎神社と云り盛衰記平家物語に志保式ハ志雄を
 書とてと志保と浦ハ庄名村名とさるけ畢竟志乎正字に
 て万葉の之乎ハ借字をうべし又ハ歌の端詞ハ赴參氣比大神

宮行海邊之時作歌とありとの氣比の比ハ多の字の誤り
 式の氣多の神社とすゆ疑ふがごとくあはれ神ハ神護景雲二
 年元々戸田二所室元元年奉幣帛嘉祥三年授従二位仁壽三
 年封戸十畑田二所补衛二年置常住僧聽度三人のりくと国史と云
 万葉ハ此神名の奇とていふれと深源の家集ハ神のす気多
 の深山本志とていふはそいひのむ君の子とせ誠とありとの左衛
 門佐誠信餞ナふ日ハ順の奇ハ順天元五年能登守に任一任ハ
 いもや三とてさるありとてはるそとていふて証す順登とてり
 下ハ餞送の度滋保胤ハ詞本朝文粹ハ出て其時の別情ハ
 感慨深き多神に便り今嚴然とて能登国の神の一宮

十六長
けいごのうもきぬをくにきりぬのわいり

十六長
けいごのうもきぬをくにきりぬのわいり

けいごのうもきぬをくにきりぬのわいり

此等の端詞射熊来村往時とあり此対の字をさし

とむ之例を十六卷自肥前国松浦縣美弥良久崎發船直射對

馬渡とありとむる熊来はとの熊木也酒屋はさむ酒殿と

酒屋も酒を置所るるべしおのれ考と

古事記小於高志前之角鹿造假宮而坐云々其御祖息長帶

日賣命釀待酒以献尔其御祖御歌許能美岐波和賀美岐那良受

久志能加美登許余还伊麻須伊波多多須々久那美加微能加牟菩

岐云々日本記崇神天皇卷二天皇以大田田根子令祭大神是日活

日自舉神酒献天王仍歌之曰許能淤和破和餓淤和那羅孺那磨

等那殊於朋望能農之能介淤之淤和云々心神紀の大御歌二須

須許理賀迦美斯美岐尔和禮惠比迄祁理許登那其志尔和禮惠

比迄祁理云々とありされば此須久那美加微能加牟菩岐ハ神名

式の能也郡の宿那彦神像石神社云々の於朋望能農之能介

淤和ハ羽咋郡の大穴持像石神社云々の須須許理賀迦美斯美

岐尔和禮ハ珠洲郡ノ須々神社云々の弘仁私記ニ以彦神是造

酒神也とあり又久志ハ酒といふる是等故以て之を名義考

小能也ハ吞所々吞門々々者ヤ通せらるり便ち々摩多

郡小大吞即あり羽咋郡小酒井保あり又十七卷より造酒の哥十八
卷より天平勝宝元年五月五日即送酒清見歌あり彼是抄りび
こゝに只これ徳来酒屋のこゝぞ開國来造酒の事なりと記す
今の巖窟の神水七尾の人家二千餘戸と記すと汲むと盛夏少く
酒より多し酒を醸すに味醇美他ふもさきもの息長帯日
賣命の精靈猶、道成獲りしと記す

ツツエノシマ 十六
机之島

十六長
かまねのつら名の志保の志づかきとひひまひもらきとひひ

はかまねと古点とひひまひの解、既小香島の條下も記
せむとる不略とこの机之島に麻島歌長濱の浦よりむひの島

へちりれ少島とてその里人の大やう志づかきとひひまひを弘治
の比七尾の塚ま畠山依理大夫義則ハ風雅の人と舟しては机の
島小あまび人丸机島の短歌のつらふよとて丸の座とこの島
ふきとてやうと月村斎宗碩一作崇順と伴ひ和歌辨奇の會志は
るり源氏物語の抄萬水一露もこの比宗碩の息子宗潤といふ
能々の辨奇の編述とるん又は机の島小坂をてと標名あり
は観池の水常ふまるとてとてとて

ナカハナウラ
長濱浦

ナカハナウラ
はつらのうらふあまひとてとてとてとてとてとてとてとてとて

長濱和名抄の能や郡の即名ふとるれを比郡とてとてとてとて

いしをこの地をわたりゆくに先所と云るれ府中村海田より

大田村矢田村をどりふりし一多みの濱にまると是濱と云ある

なりこのまふ卿の園にふる時別荘をかきくまをりするし

方人口碑寸許に能やの城中の園にまをりてまあるなるり

まのまをりて急山机急るる目路ふつぎ急流に捕れり

能登乃島山 十七

十七族頭
いふきたてふあまきまのいふのいふまやまよまこれいふり

いふかまびり

この世人をわたりあまき能やの島に呼ぶ北の山をぐる陽成実

録元慶七年十月二十九日勅令能や同禁伐損羽咋郡福良

泊山木渤海客著北陸岸之時必造帰船於此山住民伐採或

煩無材故豫禁伐木とあり羽咋郡と此鹿島郡のり

あまき能やの島に呼ぶ北の山をぐる陽成実

雨勢之河波 十九 饒石河 十七端詞 鳳至郡 同端詞

十七
いふにあまき能やの島に呼ぶ北の山をぐる陽成実

まのまをりて急山机急るる目路ふつぎ急流に捕れり

方人口碑寸許に能やの城中の園にまをりてまあるなるり

まのまをりて急山机急るる目路ふつぎ急流に捕れり

方人口碑寸許に能やの城中の園にまをりてまあるなるり

まのまをりて急山机急るる目路ふつぎ急流に捕れり

鏡石を仁峯のりき移るに兼て輓をのりふ非を三百年以
來志ううとふこき事との松を集る古來は遠鏡石のを録
河とてえふをわかくありて其まるとわありて以雲の河の部ふ
能やれりしきいとせしむきせりふ仲綱の奇ふ紅葉ちるや水を
深きせの鏡石をそみえわうとそとていふとらほいなり

珠洲熊守美 十七 珠洲郡 端詞 太治郡 同端詞

十七のころしあさびききしとてたしむらつて候ふころしわたり
十六のころしあさびききしとてたしむらつて候ふころしわたり
十七のころしあさびききしとてたしむらつて候ふころしわたり

此二首の内前の奇の端詞より珠洲郡に發船還太治郡之時
泊長濱灣仰見月光作歌とあり長濱の解は既長濱の浦下

小記に太治郡といふむらつてとて世国ふりかたの代通記ふ

羽咋郡の大海脚の語とささあつし 和名抄に抄り脚名は大海あり
とほげの庄名は大海あり是即ら

和名抄の大海
脚とすし 元暦の太治布作進とありと真濁の冠辭考

に越前の大渚那とてと地脈とむけり 珠洲を神名帳ふ浪

須神社ありいりへ珠洲をてん通す便うとて抄ふ浪の打あり

又後の奇の端詞より為贈京家頼真珠歌一首并短歌あり

この端詞

十七のころしあさびききしとてたしむらつて候ふころしわたり
十六のころしあさびききしとてたしむらつて候ふころしわたり
十五のころしあさびききしとてたしむらつて候ふころしわたり
十四のころしあさびききしとてたしむらつて候ふころしわたり
十三のころしあさびききしとてたしむらつて候ふころしわたり

おろかな考案と共可そのおの府館とともき布張の遊院ふ
そくをき誠後ともきこころ何ぞやあの人かそく此誠河
遊行のぬ次とも失えり字知久知夫利と地名もふ射水郡
伏木^{フシキ}辺ふあまべし志す地ともこれあふかあまをまきつ
お説おおくともらともあまの志す波とてそ移ああ人

伊都波多野 十八

十八
いへるまのみらゆえんひまらつともさつひそあれこれき一
仙覺抄ふ城中より城前国へ城ふふのさあつらつげこさ
海へあまのめじえの敷屋のけへあまのえとさつひまら
そこつらと懸掛伊津波多ハ城前ふあまべし古人城前の海^{カハシマ}

良見云神名帳
越前国敦賀郡五
福神社より城
前誌に此の敷
賀漆の東北あり
といふ

そ後今をこつらあ橋の海山のをらとまきせつ五^五揚山まかこ
あ海のきふゆふいつらあ思ひらとああ雁やあひん
又伊都のきふ志あ人あま城前のゆふりあまあつひまら
さつひ城前の地へあつらひと容れ

雪島 十九

十九
ゆき島のいそかふらとあまらつちよふさのめつあまらつに
畧解ふ雪島を池の中雪のほろれとらあまらつとあまらつ
いへるあまらついそかのいそかふらとあまらつとあまらつ
いそかふらとあまらつとあまらつとあまらつとあまらつ
皇子^{ミコ}等の造りつらとあまらつとあまらつとあまらつとあまらつ

寺田村掾の久米相長唐繩が前跡より新積雪彫成重嚴之起
いひ又唐繩の在影なるをいふ新くこのを夫がいひの雪のいふ
さきよりいふは新く初し又かのいふをいふのすむるが
いは例之又伊勢物語に唐繩のいふ夫とある所のいふ造り
わづらひとていふおかしき世に雪をいふ地名さしぬるが
持子に造りて雪のいふ小殖なるの唐繩を跡も奇巧線發草樹
と花属之といひり志すふ小名なる雪をいふ城中に今地名とす
ゆるは其引寄のいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
るはいふのいふ雪のいふいふいふいふいふいふいふいふ
明峯寺夫木集光とのせりいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

繁山シゲ 十九

十九長
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

畧解ふ是れ地名とせむれとて唐繩なる城中へ入又いふ雪のいふ
志すはふふ山なるいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

大坂

おほさかのわたりとていふにみづかきかたがたありつ
たうと勅探名所集小城中とていふにありては川二上と
ありよりいふに深きとありては考ふべき地なり畠澤小大和
國葛上郡とすともありし

越乃大山 十二

十二
こゆきとていふのむらやまゆきとていふのむらやまのありきとていふ
畠澤とていふ神名姓記前丹生郡大山湯坂神社和名抄城中婦
貞坂大山とていふにいづれかの國より京へ歸る人の言をむ
と愚拙は奇洞ふゆきとていふにありては京へ歸る人もありし

京より任國ふむむとていふの奇とていふにありては加賀の白山
よりいふに北國の往還に海濱路也便ち營長兼元平大納言明忠
配所の道次城前の函名金澤若細トコガ末とていふに城加賀國菅生社
を御一條系末とていふに能や於の津崎とありては出りへて
は奇城加賀の海濱より白山を御一かたを流せりなる人
を證の影とありてはすまふに大山城とていふに影とありては
出にありては奇城任國ふふ京より城中へ入るとも途中の此奇なる
奇一勅探名所集藤原小城中大山とていふに城中ふ入れを立山
とす一人ありては奇城とありては奇城とありては總國風記
加賀國の石川野小白山神社大山神命とありては奇城の大山

良見云白山の
大山神後ハ別
山ト記坐せり
白山記小別山
大行事是大山
地神也といひ

白を風土記に
 飛して白山神
 と大山神余とさ
 二比神社とさ
 とよみ考へさ
 後とさ

矢山の白山の神もかむる一つ白山の神と其の神となる一寸も産
 の任國の人とりつ和丹抄の婦負郡の大山郷を引出せしと
 述せる一國の鎮を對照して國名を引出してし一
 婦負郡を引出せしと

之良夜麻十四

是を越中へ入りしりの旅宿をのてるに一白山の北方
 鎮後の巨嶽を凌ぎて天と摩志を考ずる高き富士と
 山中の廣き十里ゆめふるふう雪ふりて消せど
 此の城の高きれは是の冠字の多ク夫等麻とりて愚拙

十ふ古紀に搗衣とか今白山の禁尾添村中宮村辺にイラと
 以刺多く他處に亦草あり是を製せしとイラとと又
 イラワタとと方言寸回物を搗ぐ麻草の皮を製せしとば
 イラタとよび線紫のと製せしとはイラワタとよび白山産の
 撫撫古来として織る着寸厚とえあるの一つ衣をしらせれは

搗衣とは此草製して白山の冠辞とる寸由縁あるに似る搗衣は
 雅に山標とるとその類にあるに似して搗衣の搗は其木の謂ふ非寸白色の一つ即ち
 他覺抄に搗は白色の義とり又円珠庵雜記に搗は白きとりて一つ日本私
 記に搗衣ハ白色也と解して凡て白色の一つとり搗衣ハ白きとりて製すれハ白き
 木綿とるとり豊後國速見郡の風土記に搗衣ハ他國の古哥に搗衣又白搗衣とり
 白山とよめる多ク夫頂麻と混じて寸厚名抄小哥の字をイラと訓一生刺小草
 と註すれとる一つ小大の二種あり大を五六尺とり及びイラ

とい刺のいひるりイラワク又イラヒ又イラツるく俗をさぐる思ひ余

なり苛政苛法とは味ひるり三十と因木かま古泥あまざりといはれ

の字ふ泥むとのまて三十といはらるりイラワクの色潔白して雪ふ

らしくともはれ猪倉白山とほら称来もなりおりのまざり
神代巻の千尋摺

縄といもはれいしこて是のまて古人も考に説きまの強得よはれといひ

的実のたふおれふりい記して傳ふ又此山を神具の鍾とい

奇石奇木ハいふえさうなりといに靈禽すありとて蕪とよふ後を

如帝の淳製より山の杉の木を産ふといはれしをすくふ下を蕪の

るく如を来より蕪の説喋し伊孫を胤の猶新註は晁補之の新遊北

山記と引て一鳥を是にめて又を来系所の物を系蘭山とる者之と

雪鷄ふあつれごと皆於るらるるなり

あはれらるるあの子を獲るといと新と世とすとい人字書

に頼あはれ蕪落蓋 一の靈禽ハ即ち警るるも考索とあふす

此字の考索をいふ其を説くさうり 以て一の教をさす事とい

叙するのさるるい人といて字をいひ明かせる其志のせらるる

いれ殊稱おはれ又按頼とい者ハ奇端とい又よ火災を避るとも頼軒録

類せしとい即ち許雅禎賦也尾向宮扇只弄望黄とあり雛ハ微音望ハ類

せされとい是ハ雅禎筆端の増飾とて俱ハ深山の神禽を色ハ其地用て不

同とありとい其種 類とあふい可らるる

頼道之池 十二

十二

十二

十二 十二

藻塩類字名所皆加賀国と云ふ所のあり古傳あり
 て志つるをよまるとして勅探名所と稱す又鑑海
 作事ありと云ふ後に國語ふまの語と云ふ不書きとの
 ありし 多シキ湯河長皇子遊獵河池とあり鑑海池は湯と云ふ
 多シキ鑑海の小野とあり池のうらさかゆと云ふとす
 姓氏録雄略天皇沖世獻加里乃郡仍賜姓輕部君と云ふは
 加里乃郡若ハ舊事記國造本紀の加里國ありや里と宜と
 音便通寸郡と國とハリ通一用也かかれ名の加里より負
 え考へと近來諸國名義考をにいへるが如く又輕部ハ
 倭名抄の能美郡小輕海あり即ちと輕海卿あり輕部輕
 海音相通す又今石川郡針道村あり獵針民間誤り是等の

るはきりてあふとふ 勘ふべし

角島 十六

^{十六} 角島のヤのあふ人のあつりててててててててててててて
 藻塩草は能美國とすれと云ふ國のけ地名もててててて
 ところ人を長濱の浦と云ふ 万行村 三室村と云え輕の浦
 と云ふ村あり此海邊磯邊と云ふげう海をわたりかどあり
 して小急これいゆへのほのふまると云ふ角の字とが
 洲に渡ると云ふと云ふ説はよくとありは似たり畧釋と云
 武の長門國角島半長と寸云ふはありし
 能登河

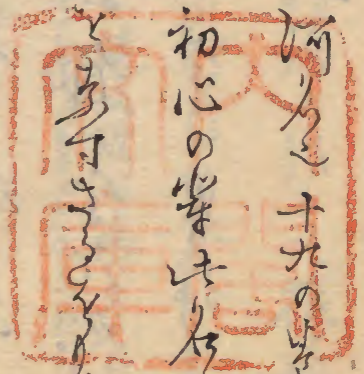
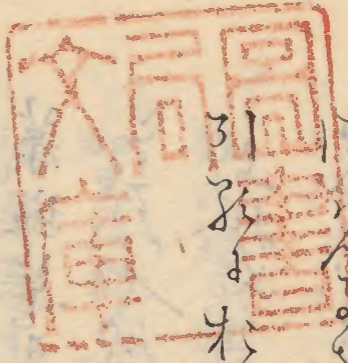
此河万葉集中十の巻十九の巻とのかうやもふれども

能く画のしふれど大初國原上巻ある河の十九の巻の

奇、即ち三笠山とて人合せしむる初心の巻は

初心の巻は

初心の巻は



初心の巻は

